

小川町の思ひ出

橘 糸 重

佐々木先生は、まへ／＼から竹柏園の古い時の事で私の覚えてゐる數々を書いておく様と度々仰せられました。ついそのまゝにして長い事たちました。今は先生も、もうそんな事は少しも仰しやらないのですが、あまのじやくな私は、今頃になつて一寸かいて見る氣になりました。更にもう一段のあまのじやくな事には、先生が見せよとも何とも仰しやらないのに、お目にかける氣にさへなりました。

一番はじめの小川町のお家には、一度小學校のかへりに道をき／＼一人で伺つたことがあります。まだ光子刀自も昌綱様もお國元にいらしたので、大先生と今の先生とがどこかの歌會にお出でなるそのお留守居に姉があがつてゐましたので、母からいひつけられてあとから私もいつたのでした。

小川町通りの小川亭といふよせの横町を、駿河臺の方へ入ると、ぢきに左側に低い土手があり、その土手の上に四つ目垣が結つてあり、何か細い枝の木がたわ／＼と植ゑてありました。それについて左へまがるとくぐり門のあるお家がそれでした。門をあけ、格子の處までゆきましたら、姉がお玄關の間にお机を出して、大先生のお手本をお手習してゐました。姉はお留守

居の中にお清書をし、その上に歌を何首とかよんでおくやう大先生の御いひつけだと、一所懸命になつてゐました。それだけ覚えてをりますが、其の時大先生たちがお歸りになつた事や、自分達がどういふやうにしておいとまをしたかは、ちつとも覚えてをりません。

それから光子刀自と昌綱様とが御上京になり、もつと大きいお家へおひきうつりになりました。前のお家のぢき近くで、やはり小川町一番地でした。これが即ち竹柏園の方々のなつかしい「小川町時代」といふ名のお家となつたのでした。母が提灯をさげて、私の手をひいて暗い横町をまがり、「たしかこゝぢやつた」といひ／＼ゆきますと、暗闇からも足音がしたと思ふとたんに、「おゝおさちさん」と仰つたのが光子刀自で、昌綱様のお手をひいてゐられました。お二人で、「五十様」の縁日においでので處でした。それでも私たちの爲に引かへして下さり、母は十疊のお座敷で、色々お話をしてをりました。昌綱様は切角の「五十様」がおそくなるのにお怒りもなさらず、「こま」などまはしてごきげんよくしてゐられました。

多分その時、大先生も今の先生もいらしたのでせうのに、それは忘れてしまひました。

(右二項は今考へますと、明治十五年の末あたりか、十六年のはじめあたりと思ひます。)

(此處數年たち申候)

其の後毎月十一日の月次歌會に、母や姉が伺ふやうになりましたが、いつからか私も時々母の腰巾着であることとなりました。十疊のお座敷の四方ぐるりにお座蒲團が並べてあり、その真中にひくい臺がおいて、その上に新らしいお短冊がのせてありました。(兼題や當座の歌をかく爲めでありました。)そばに細長い重硯ぢゆうすいりの箱がおいてありました。お床の間の鴨居に、「當座何々、競點何々」と書いた紙が貼つてありました。大先生はほどよい處へお机をすゑて、そこにいらつしました。兼題のお歌や當座のお歌をおなほしになる爲で御座いました。母が不參する時など、私はよくお手傳ひをするやういひつけられて、少々早い目にあがりました。細長いお重硯の箱を一つづつお座ぶとんの前へおき、水入から少しづつ硯の海へ水をついでおきます。だん／＼お客様が見え、おぎぶとんがふさがつてゆきまます。大先生のお弟子様や、まらうどぎねの松平春嶽公や東久世通禧伯、小出繁様、鈴木重胤翁など、女の方々には、鶴久子様、中嶋歌子、松の門三舛子様、大野定子様など、また西舛子様、竹屋雅子様などは、やはりお弟子さんで御座いました。此のま

らうどぎねのおいでになるのは、一月の發會と十二月の納會でした。

皆様は兼題のお歌を短冊に書いて、中央のお臺におき、そして當座のお歌を考へてゐられます。私などコンマ以下は、「競點」はよまんでもえゝから當座だけよむやう」と仰つて下さいますが、中々よめませんでした。そのうち時がたつて披講がはじまるからと呼ばれて、それまで遊んでゐたお茶の間からお座敷の隅の方へ出てゆきました。大先生が少しお座をおすゝめになり、短冊臺におむかひになり、今の先生がおそばから短冊を一枚づつとつておあげになります。大先生はまづその日の兼題を、「何々といへる事を」とおよみあげになり、その詠者の名を「誰々」とおよみあげになり、(まらうどぎねのお方々のは、誰々の君と仰られました)それからゆつくりと抑揚をつけておよみあげになりました。(一寸謡曲のやうなふしで)詠者は歌の前後におじぎをします。順をおうて出席の方々がすすみますと、大先生がご自分のおよみあげになります。此の時一同はおじぎをいたします。それから競點の天地人をおよみあげになります。その點者は、その日御出席のまらうどぎねのうちのおひとりであつたやうに覚えてをります。

それから皆様おくつろぎになり、發會納會にはお酒が出、お膳が出、例月の會にはおそばが出、あちらこちらでお話がはずんだり、お短冊臺の當座のお歌や何やを御覽になつてゐる方々もあります。一しきりあつて、だん／＼と皆様がお歸りになりますと、私もお茶の間でおそばをおちさうになり、おいとまを

いたします。歸宅して母に色々報告をしますと、おあとかたづけのお手傳ひはどうしたのかと叱られました。先生があまりおそ（おそくのこと）ならんうちおかへり」と仰しやつたからとすましてをりました。

大先生の還暦のお祝は、兩國橋のほとりの井生村櫻といふのでおにぎやかに行はれましたが、私の家ではをりから母が病氣になつて床にをり、姉も一寸留守で御座いましたので、私はほんのお祝にだけあがり、お手傳ひもろくにせず、お座敷のおもやうを一寸拜見いただけで歸宅いたしました。

大先生御逝去の翌年、神田の大火がありました。其の頃は今の様に自動車ポンプがうなりをあげてはせてゆくなどいふ事はありませんでした。萬世橋そばの消防署（場所は今と同じ場所ですが、建物はもつとずつと貧弱な）の火の見櫓で三つぼんの半鐘をけたたましくうつのがきこえました。戸をあけて見ますと、どうも小川町、佐々木先生のあたりが御近火らしいといふので、其の頃家にとまつて居りましたいとこ達がかけ出してゆきました。私達はどうかであらう〜と見てみました。夜のしばらく〜あけにいとこの一人が足袋はだしでかけもどつて來、大變な大火で、佐々木先生ではすつかりお片付けになり、今まで皆でお手傳ひしてゐたが、幸ひ風向がかはつたので、お家は大丈夫といふだけ見とどけて來たのだと知らせてくれました。びつくりして姉と二人急いでお辨當をこしらへ、お見舞にかけつ

けました。今の様に非常線など張られませんでしたので、人ごみをぬけてぢきにあがる事が出来ました。お二階へあがつて見てまづ驚きました事は、一夜のうちに見わたす限り焼野原になり、あちこちに土藏がポツ〜残つて居りましたが、それが時々フーツと火をふき出し、がら〜と崩れるなど物すごいけしきでした。

前夜、火がせまりました折に、光子刀自と昌綱様は駿河臺の方におのがれになり、今の先生は、「お家に火のつくまでは」と、大先生の御肖像の額を持つて御門の處を守つていらしつたださうです。其の時はうちのいとこたちも御一緒にいたのださうですが、幸ひ、風向がかはり、御一同ホツとなさつたのださうです。私達があがりました時は、まう光子刀自も昌綱様もお歸りになつてゐられました。やはり其の時お見舞にいらした大橋博文館様が、日本橋の方があやふくなつたといふので急いで歸られた事を覚えてをります。この大火は、水道橋際からはじまつて、ずつと神保町、小川町、鎌倉河岸などやきはらひ、一時しづまるかと思えたのに、更に火がぶりかへして日本橋の方へのびたのでした。何しろ大へんな大火事でした。

それから竹柏園は、今の先生が奥様をおむかへになりました。園主となられました。大先生のお弟子さんであつた方々も、ひきつづぎ今の先生におをしへをうける事となりました。故大塚楠緒さん、富田愛子さん等もさうでした。私は、ずつと御無沙汰をしてをりましたが、或る時先生がいらして、少し又歌をよ

みませんかと仰しやつて御著書を下さいました。私はまた恥かがやかしく、のこくゝあがるやうになりました。日曜の午前に皆の爲め源氏物語の御講義があり、其のあとで一週間の勞作歌七八首を直していただきました。大塚さん、富田さん、大橋時子さん、島田隆子さん、同愛子さん等、少しおくれて吉田廣子さん（今の片山さん）長谷川時雨さん、同松子さん等々。

午後からは男の方々のおけいこでした。川田様がお弟子入りをなさいました時は、たしかさういふ日であつたやうに思ひます。安藤直方様と仰しやる方——これは私もお顔だけは知つてをりました——が、中學の制服を召した方と御一緒にいらして、その方は「あとで紹介するからね」と仰つて、お玄關脇の四疊半（大先生時代から場とおひならはしの室）へはいつていらつしやいました。私はお講義を伺つてゐても、いつも氣が散つてゐるのですから、そんなことも横目で見てゐたのでせう。その時の中學の服を召していらした方が川田様と、あとでわかりました。

竹柏園は多士濟々としてにぎやかに、男の方では、石樽千亦様、小花清泉様、三浦守治様、横山碩様、小原頼之様など、女の方では、大塚楠緒様、峯百合子様などで、一か月一度づつ研究會がひらかれることになりました。いつも記録係をして下さるのが石樽様でした。研究會とは申すものの、少しは茶目氣分もまじり、批評をひきもどす爲めに、奇抜な歌も出て、時々檢事格の横山様、辯護士格の三浦様、審判の先生などと、中々面

白い事がありました。或時「音」といふ題が出ました時、ただ一人座禪堂の裏に寂としてふりつむ雪の音をきくかなといふのがよみあげられました。色々評がこんぐらかりました時、審判官の鶴の一聲「イヤナ歌也」というので作者も苦笑してゐられました。

ゆきすぎぬ又ゆきすぎぬ小夜ふけて母まつ門の小車の音といふのが御座いましたが、大勢の評は可憐なる歌といふのに一致いたしました。或方が、「その母不品行ならんにはますます可憐なり」とつけ加へられましたので、その作者は、ひどいひどいといつてをりました。「涙」といふ題で、

む かうほねのやせたる花に一しづくおけるやなにの涙なるら

といふのがありました。「ことさらにかうほねといはずもがな」といつて、いつまでもくすくすと笑つた方がありました。作者は「かうほねは一寸考へたつもりであつたが」といつてゐられました。評者は、「河骨（皮骨）ならやせてゐるにきまつてゐる」と、地口流に氣をまはして笑はれたのかとあとで思ひあたりました。しかしこれは評者の心を更に氣をまはし過ぎた事かとも、又氣がつかしました。川田様、長様など、さういふ夜、一高の寮からいらして門限におくれぬやうとお歸りになつた事を覚えてをります。新井洗様もやはりその頃からさかんに勉強をしてゐられたと思ひます。

（此の處又々數年たち申候。）

竹柏園は西方町へおうつりになり、ますますくさかんになりつつあります。私はここで一寸考へて見ます。昔ながらに「心地こそすれ」とか、「なりにけるかな」とか、何千年一日の如し、（但しとぎれ／＼に）一つ處であしづみをしてみますが、氣がついてあたりを見ました時は、周圍は森閑として人つ子一人見えなくなつたやうです。はるかのはるかの方へすゝんでゆかれた人達のあしあとだけが、私のそばに残つてゐるので御座います。

【入力者注】底本と行を合せるために、フォントサイズを小さくした箇所があります。

底本：「心の花」第四十二巻第五号

昭和十三（1938）年五月一日發行

入力：小林 徹

公開：令和六（2024）年五月二十八日

橘糸重【[散文作品集](#)】に戻る。